

宇治拾遺物語 絵仏師良秀 口語訳

これも今は昔、絵仏師良秀といふありけり。

これも今となっては昔の話だが、絵仏師良秀という者がいた。

家の隣より、火出で来て、風おしおほひてせめければ、逃げ出でて、大路へ出でにけり。人の書かする仏もおはしけり。

(良秀の)家の隣から、火事が起こって、風が覆いかぶさるように吹いて(火が)迫ってきたので、逃げ出して、大通りに出た。

(家の中には)人が(注文して)描かせている仏(の絵)もいらっちゃった。

また、衣着ぬ妻子なども、さながら内にありけり。

また、着物を着ていない(良秀の)妻子などもそのまま(家の中)中にいた。

それも知らず、ただ逃げ出でたることにして、向かひのつらに立てり。

(良秀は)それにも気かけず、ただ(自分が)逃げたことをよしとして、道の向かい側に立っていた。

見れば、既にわが家に移りて、煙、炎くゆりけるまで、おほかた、向かひのつらに立ちて、眺めければ、

見ると、既に(火は)自分の家に燃え移って、煙や炎が立ち上ったときまで、(道の)向かいに立って眺めていたので、

「あさましきこと。」とて、人ども、来とぶらひけれど、騒がず。

「大変なこと(ですね)。」と人々が、見舞いにやってきたが、(良秀は少しも)動揺しない。

「いかに。」と人言ひければ、向かひに立ちて、家焼くるを見て、うちうなづきて、ときどき笑ひけり。

「どうしたのですか。」と人が言ったところ、(良秀は道の)向かいに立って、家が焼けるのを見て、うなずいては、

時々笑った。

「あはれ、しつるせうとくかな。年ごろはわろく書きけるものかな。」と言ふ時に、

「ああ、大変な得をしたなあ。(今まで)長年下手に描いていたものだなあ」と言う

とぶらひに来たる者ども、「こはいかに、かくては立ち給へるぞ。あさましきことかな。物のつき給へるか。」と言ひければ、

お見舞いに来た人たちは「これはまあどうして、このように立っていらっしゃるのか。驚きあきれたことよ。

霊がとりついていらっしゃるのか。」と言ったところ、

「なんでふ、物のつくべきぞ。年ごろ、不動尊の火炎を悪しく書きけるなり。今見れば、かうこそ燃えけれと、心得つるなり。

「どうして霊が取り憑くはずがあるうか(いや、ない)。長年、不動尊の火炎を下手に書いていたのだ。今見ると、

(火炎は)このように燃えていたのだなあ、と、理解したのだ。

これこそ、せうとくよ。この道を立てて、世にあらむには、仏だによく書き奉らば、百千の家も、出で来なむ。わ党たちこそ、

これこそもうけものよ。この道(絵仏師の仕事)で、生きていくのならば、仏様さえ上手く描き申し上げるのならば、

百軒千軒の家もきつとできるだろう。お前たちこそ、

させる能もおはせねば、物をも惜しみ給へ。」と言ひて、あざ笑ひてこそ立てりけれ。

これといった才能もありでないので、物惜しみなさるのだ。」と言って、あざ笑って立っていた。

そののちにや、良秀がよちり不動とて、今に人々めで合へり。

その後のことであろうか、良秀のよじり不動として、今でも人々が(良秀の絵を)称賛し合っている。